

「働く留学生」をめぐる諸問題についての考察 (2)

—福岡市の日本語学校に通うネパール人留学生のエスノグラフィー—

Foreign Students Adapting to Japanese Cultural Context in Their Working place in Japan (vol.2) An Ethnography of Nepalese Students Studying at Language Schools in Fukuoka City

岩切 朋彦

Tomohiko Iwakiri

鹿児島女子短期大学

「働く留学生」をめぐる諸問題について、前稿で提起した問題に答えるために、本稿では福岡市の日本語学校に通うネパール人留学生に対して行ったインタビュー調査をもとに、留学生の日常生活をエスノグラフィとして描いていく。留学生たちはアルバイト先において、学校教育では経験できない言語的かつ文化的な学びを得ており、他者との相互作用を通じて複雑な文化的アイデンティフィケーションの過程を経ていることが明らかになった。このことから、留学生の就労制限の緩和は、学習効果への影響という側面から考えてもそれほど問題はないと結論付けた。むしろ、就労を通じた「状況的学習」という観点から見れば、地域コミュニティとの社会的相互作用を経ることで、来るべき移民社会へ向けた過渡段階として、多文化共生の社会的素地を作り上げているとも言えるのである。

Keywords : foreign students as a laborer, cultural identification, working hours of foreign students, situated learning, multicultural symbiosis

キーワード : 働く留学生, アイデンティフィケーション, 留学生の就労制限, 状況的学習, 多文化共生

1. はじめに

本稿は、「働く留学生」をめぐる諸問題についての考察(1)「グローバルな移民現象としてのネパール人留学生」の続稿である。前稿では、現在ネパール人留学生が増加している理由として、南北の経済格差を背景としたネパール人移民の高い送り出し圧力と、日本の労働市場における新規労働力の枯渇という需給構造が背景にあることを明らかにした。日本が魅力的な留学先となっているのは、特に親日だからとか、日本文化に興味があるからというわけではなく、働きながら勉強できるというのが第一要因となっているのである。つまり、ネパール人留学生の増加は現在のグローバルな移民現象の一部として捉える必要があるものであり、すでに福岡県の多くの事業所は「留学生労働力」なしでは経済活動が成り立たず、需給構造は常に再構築される状態となっている。

しかしながら、そうした需給構造は入管難民法で定められた「週28時間以内」の就労制限を留学生たちが守らない限りにおいて再構築が可能なものとなっている。また、「出稼ぎ留学生」にせよ「まともな留学生」にせよ、週28時間以内という就労制限は生活費と学費を賄う上で現実的な数字ではなく、ほぼ有名無実化しているという現実がある。本格的な労働移民の受け入れに関する議論を政府は躊躇しているため、フロントドアからの移民受け入れは当面現実化しそうな状況の中、留学生のみが法律違反を犯すというリスクを背負いながら、経済的な需給構造を支えている状態となっている。

前稿では、こうした状況を踏まえた上で、「働く留学生」をめぐる二つの問題提起を行った。ひとつは、留学生の就労制限の緩和についての問題であり、いまひとつは就労時間と学習効果との相関関係についての問題である。この二つの問題に答えるためには、「働く留学生」がどのような日常を送り、アルバイト先でどのような経験をしているのか、また留学生生活や日本での勉強についてどのような考えを持っているのかについて、詳細に知る必要がある。そこで本稿では、福岡市の日本語学校に通う留学生に対して行ったインタビュー調査をもとに、彼らの日常生活をエスノグラフィとして描き、前稿の問題提起に一定の答えを出しつつ、将来日本が向かえるであろう移民時代に向けた「多文化共生」のあり方についても、考察を行っていきたい。

2. 調査方法について

調査方法としては、福岡市で筆者が非常勤講師として勤めていた日本語学校に通うネパール人留学生インフォーマント8名(全員20代)を対象にしたインタビュー調査を行い、普段の日常生活を詳細に聞いていった。このうち本稿では紙幅の都合上5名のインタビュー内容を紹介する。インフォーマントの選別基準は、日本語の会話能力の高さを重要視した。本来であれば、インタビューで使用する言語はネパールの公用語であるネパール語を用いるべきだが、筆者はネパール語能力を持たないため、日本語を用いることにした。そのため、長時間に渡る日本語でのインタビューに耐えられる会話能力の高いインフォーマントを選ぶ必要があったのである。

ネパール人学生の多くは漢字に対する苦手意識が強く、読み書き能力は全体的に低いものの、聞いたり話したりする能力は漢字圏学生と比べても突出して高くなる者が多い。中には、日本語学習を始めてから1年を過ぎたころには、すでにティーチャートークを意識する必要がなくなるほどに上達する者も少なくない。なぜ、わずかな時間で、ほとんど日本語能力のない状態からそこまで至ったのか、会話能力の高さを基準にしたのはそれを探るといふ意味もあった。

インタビューは、当時筆者が所属していた大学院棟内で行った。所要時間はインフォーマントによって異なるが、多くは約90分で、一名のみ166分かかっている。留学に至る経緯を含めて総体的にアプローチするため、インタビューの手法はライフストーリー・インタビューを用いた。順序としては、まず依頼書を用いて研究目的を説明し、承諾書に署名を得た後、これまでの人生について順を追って語ってもらった。次に、日本における平均的な一週間の生活について聞いていき、重要だと思われた点に関して、対話を掘り下げていった。最後にこれまでの日本の生活を振り返り、どのような感想や評価を抱いているかを尋ね、自らの将来とどのように結び付けていこうと考えているのか語ってもらった。インタビューの内容は承諾を得て同時録音を行い、後日すべてを書き起こした¹。

インタビューは、ライフストーリー・インタビューのセオリーとされる自由対話形式によって進められた(桜井, 2005; 大久保, 2008)。質問の大きなプロットは上記に示したようなものだが、インタビューを通して初めて明らかになったことについては新たな問題設定としてより重点的に尋ねるようにした。さらに、この問題設定を、別のインフォーマントへのインタビューに反映させていくことで、明らかにすべき問題を積み重ねていった。

3. 福岡市の日本語学校に通うネパール人学生のライフストーリー

3.1. ケース1: Gさんの場合(男性: 2015年11月インタビュー実施)

本研究において、最初にインタビューを行ったのがGさんであるⁱⁱ。授業では時折居眠りの目立つ学生だが、日本語の会話能力は比較的高く、フリートークなどでは積極的な発言が見られる。日本語学習歴はインタビューの時点で1年8ヶ月ほどであったが、会話能力が高かったために、当時すでに東京の専門学校への進学を決めていた。

G: ネパールでは先生、家族の最初の男は、必ずどこかへ行って、お金を稼いで、家族にあげます。

—外国に行って、働いて、お金を送るといふのは、もうネパールのⁱⁱⁱ

G: = (少し興奮気味に) 送るのは本当に幸せなことです。家族のため。

—伝統みたいなもの?

G: はい、そうですね。だから、今だいたいみんな男は、他の国に行きます。

—自分の国では働かないんですか?

G: 働いても、お金があまり貯まらないです。見えないです。いくらでも稼いでも見えないです。ネパールでは先生、一日仕事すると、500円くらいもらえる(笑)。500円くらいもらえる。

留学の第一の動機を出稼ぎだと語ったのは、インフォーマント5名のうちGさんのみであった。大学へ入ったその年に、周りの友人が、次々と海外に出稼ぎに行くのを目にして、自分も「稼ぎたい」という気持ちが生まれ、日本への留学を決めたのだという。このことは、特に意図して聞いた訳でもなく、日本留学に至る経緯を訪ねている間に何の躊躇もなく語られた。ネパール人労働移民の世界的な離散については前稿で示したとおりだが、ネパールの男性にとって、国外に出稼ぎを行うことは、もはや伝統のようなものになっているという。

Gさんの日常は、日本語学校での学習以外はほとんどがアルバイトで、深夜のコンビニ2か所と食品工場を掛け持ちしており、月曜日以外は働きつめの毎日だ。だが、Gさんは仕事場のことを実に嬉しそうに生き生きとして語るのである。そこには、仕事に対する自分の勤勉さや有能さに対する、明らかな自己肯定が覗える。

- G：楽しい。私は今、最初のアルバイトの人だから、誰も何も言わない。
—そっか、工場ですか。工場でいわゆるベテランですもんね。もう長い人。
G：そう、前からやっていたので、全部仕事分かってます。
—そっか、全部仕事は分かっている。みんな社員も、Gさんお願いって。
G：そうそうそう。時間が間に合わない時も。あと仕分けというのもありますよ。仕分けは本当に大変な仕事です。作ったものをコンビニのパレットに入れる仕事。何人も日本人来たけど1日2日3日やって、あと他の日は来ない。
—じゃあもう、すぐ辞めてしまうということ？
G：今まで、本当にずっとしているのはネパール人だけ。先生、今までネパール人だけ。
—やっぱり大変だから辞める？
G：大変なのと、ネパール人が多いので、ネパール語で教えてもいい。
—ああ、そうか。ネパール語で教えても大丈夫だからね。
G：そうそう。私の学校の友達も二人入っていた。私教えた。ちゃんと教えた。これやってとか、どうやって早く入れるかの方法を教えましたけど、あの人は私に（笑）プレッシャー、プレッシャーかけましたと言いました。あの人は早く仕事をやれと言う。
—ああ、なるほど。あのGさんという人は本当に厳しい先輩で＝
G：＝（笑）そう、厳しい、あの人が厳しいよ！
—プレッシャーかけてくるから早くやれて＝
G：＝でも、厳しくない。
—普通のことをしただけ？
G：最初は誰でも大変ですよ。ずっと1ヶ月3ヶ月やれば慣れるけど。みんなは、やりやすい仕事を探している。でも、それはない。それはないよ、先生。

筆者がそれまで行ってきたネパール人学生に対するインタビューでは、アルバイト先のいわゆる「単純労働」の辛さや不満が語られることが多かった（岩切，2015）。しかし、Gさんのケースでは、仕事場で活躍することと自己肯定が結び付けて語られていた。このような労働と肯定的な自己アイデンティティを結びつけるナラティブは、以下に見ていくインタビューにおいても、しばしば語られることになる。自身がいわゆる「出稼ぎ留学生」であることを隠すこともなかったGさんだが、専門学校生として上京することはこの時点ですでに決定していた。将来は日本で就職したいと考えているという。

3.2. ケース2：Hさんの場合（男性：2016年1月インタビュー実施）

Hさんは1年半のコースに所属する学生で、日本語学習歴は1年3か月ほどである。学習意欲は高くまじめで、居眠り等はほとんどないが、少々うるさいと感じるほどランダムな質問も多い。留学の動機は、「男だし、一度は海外で遊びたかったから」というもので、親戚が東京にいることもあって、日本を選択した。アルバイトはホテルの清掃業と弁当チェーン店の二つを掛け持ちしており、特に後者の職場について多くを語った。

- じゃあ、雰囲気はいいんですね。
H：そうですね。私手伝えばもちろん日本人も手伝います。誰でも、ネパール人も同じね。その気持ちがあります。今、大丈夫です。日本人と働くのは。
—楽しそうだね、話聞くだけでも。
H：そう、本当に。私は日本人と遊んだり、仕事の人と遊んだり。Xさんはもう店は辞めた。でも、今も会っています。車で私の建物に来ます。「H、会いたい」って（笑）。
—じゃあ、友達もアルバイトでできましたね。
H：そうです。あと、中国人もね。中国人もいいです。もし中国行ったら、電話しても大丈夫ですって（笑）。
—日本語ですけど、アルバイトの時にたくさん使いますよね。学校の時より話す？
H：うん、学校より話しますよ。アルバイトは、弁当チェーン店（注：実際の発言は店の名前）が話せますね。店長も言

いますね。「Hは、前より日本語が上手になっている、よく分かる」。学校もね、先生のおかげで、勉強していろいろなことを、一回勉強したことは、日本語は、言えばよく分かります。それでも、上手になると思います。

ここでは、アルバイト先における日本語を用いたコミュニケーションの頻度が多く、学校で教わったことを職場で使用して覚えるという言語習得パターンが語られている。初めは苦労したものの順調に仕事に慣れ、インタビュー時では店のほとんどの仕事を任されるようになっていたHさんだが、客の素早い注文に反応して機械を扱わなければならないレジ係だけは教わったことがない。しかし、苦情の対応など何らかの事情で日本人店員が一時的に店を離れることもあり、そうした経験から、レジも含めてすべての仕事をこなせるようになりたいと思うようになったと語る。

H：そういう時（注：レジができる日本人店員がいない時）お客様が来ました。私はレジに行った。でも私何も分からない。どうする（笑）。紙を持って、弁当の名前は全部分かるから、「お客様、ご注文をお願いします」と言いました。いっぱいある。レジが、私はできないから困りましたね、その時は。お客様が来ました。私、「お客様、お金は後で払ってもいい。今、少々お待ちください。私、中で作ります。レジの人が外に出かけましたから、心配しないで、お待ちくださいませ」と言いましたね。そういう時もあるから、自分の気持ちからレジを。

—そうか、レジを覚えたいと思ったんですね、そのときね。

Hさんがこのように語る時、そこにはGさんと同じように明らかな自負心が覗える。それは、職場に積極的に貢献することで信頼を得つつ、良好な人間関係を築きながら、同時に日本語能力を向上させている自己に対する肯定感であろう。将来はネパールでスポーツビジネスを始めたいというHさんは、その経験から日本とネパールの働き方の違いを、以下のように語る。

—日本の仕事の仕方、たぶん全然違うと思うんですけど、どうですか。

H：うん、全然違います。ネパールでは厳しくない。仕事は厳しくないです。日本は、働くときは、ちゃんと働かないといけない。でもネパールは、・・・ちょっとね、いろいろな携帯とか、よく話しても大丈夫（笑）。でも日本はルールがある。もしネパールでもそのルールをフォローすれば、経済がもっと上がる。

—もし自分がビジネスをやるときは、そういう日本のやり方もフォローしたいですか。

H：これは無理ですね。ちょっと、日本のやり方をやりたいけど、お金の問題があります。日本人のようにネパールで働くこと、1ヶ月の5000（注：ルピー）で、できないと思いますね。

—あ、なるほど、もっとくれと。

H：厳しいからね。もっとお金をあげると、店はマイナスになります。日本のやり方、みんな守れば、大丈夫だけど、私だけは・・・

3.3. ケース3：Iさんの場合（男性：2016年1月インタビュー実施）

Iさんは、筆者がこれまで教えてきた留学生の中でも、もっとも学習意欲が高く、授業態度の良好な学生であり、漢字の読み書き能力も他のネパール人学生より高い、いわゆる「優等生」である。日本語学習歴はインタビュー実施時において1年10ヶ月。来日のきっかけは、日本に親戚がいたため、父親が息子のうち誰かひとりを日本に行かせると決めたときに、手を挙げたのだという。

普段はコンビニ2店舗で働いているが、早々に決まった進学先の学費を稼ぐため、インタビュー時は3店舗を掛け持ちしていた。これまで弁当や菓子の工場でも働いたこともあるが、「悪い言葉ばかり使う」工場を嫌い、来日10か月を過ぎたころに最初のコンビニの仕事を始めた。このコンビニの店長とは個人的にも仲が良く、「いつも褒められる」のだという。アルバイト先の大きな戦力として信頼を得ていることが覗えるが、さらに興味深かったのは、日本人客とのコミュニケーションについてのエピソードであった。

I：外国人ということは分かりますね。それで、「どこの国から？」とか聞いてきます。

—ああ、聞いてきますか。で、「ネパールです」と。

I：はい。「日本に来てどのくらい」と聞きますね。それ言ったら、「こんな短い時間でそんなに日本語分かりますか」と

いうことを聞きますね(笑)。

—ああ、そうですか。結構話しかけてきますか。

I：はい。今は、だいたい、特に毎日来る人いるでしょ？あの人たちはいつも話します。○山と○川（注：店舗のある場所の地名）の二つバイトあるでしょ、どちらでも見たことがある人。

—ああ、そうか。○山でも見たことがあるし、○川でも見たことがある客。

I：その時は、お客さんがびっくりしますね。「秘密ですか？」って聞きますね。そんなことはない、二つとも分かっていますと言いました。そういうこともあります。

—じゃあ、よく来るお客さんとはよく話す。タバコとか、いつも同じタバコ＝

I：＝はい、タバコ、たとえばいつも来るお客さんは、いつも同じタバコ買うんですよ。それは言わなくても、どれか分かっているから取りますね。

—じゃあ、いろいろお客さんとも話ができるようになってる。それは楽しい？

I：一回は、夜のコンビニあるでしょ。だいたい1週間くらい前にひとりのお客さんが3時ごろに酔っぱらって来ましたが、二万三千円くらいお金をレジの前に忘れていきましたね。私も気が付かなかったですね。もう帰ってから、後で気が付きました。外へ出たらもういなかったですね。その次の日また来ましたが。その時お金を返しました。忘れていましたよって。それで結構うれしくなったみたいで、「何か食べたい？」って聞かれました。「私買いますよ」って。「いいえ、大丈夫です」と言いました。

—あ、ホント(笑)。

I：私、「コンビニではそんなことをしたらだめですよ」と言いましたから。今は、いつも来ますね。いつも「元気ですか」って仕事行こうとして来て、「今日は何も忘れていない？」って言って帰ります。

—「元気ですか」とか「どうですか」といった感じですね。あの、ネパールのことを聞かれたりはしますか。地震があったときとか。

I：はい。地震の時は、いっぱい聞かれましたね。「どうでした？」「大丈夫でした？」そういうことを。

日本語能力の向上に関しては、やはりHさんと同じように、学校で学習したことをアルバイト先で実践するというパターンが語られた。学校では同じネパール人が多く、日本語を話したくても話せない場合があることから、特にコンビニの仕事を始めてから日本語能力が向上したと感じているようだ。

—日本語使う量ですね。実はアルバイト先のほうが、たくさん喋りますか？

I：はい、そうです。あと、授業中、学校では特にネパール人が多いですね。

—ああ、ネパール人が多いね。

I：(苦笑)誰でもネパール語で話します(笑)。

—そうですね(笑)。授業中にね。

I：日本語で話そうと思っても、できないでしょ。

—ああ、できないことあるね。

I：それであの、特に喋るのは、日本語喋るのは、バイトですよ。

—ああ、そうだよ。やっぱね。

I：自分の国の人が誰もいないでしょ。それで日本語使わないといけないですね。

—コンビニ入る前は どうでした？

I：コンビニ入る前は、そんなになかったですね。コンビニ入ってから、もっと話せるようになったと思います。

—学校だけじゃない、日本語の話す＝

I：＝特に学校で、どの用法を使う、言葉を使うのか、文法をどうやって使うのか、それを勉強して、喋るときは、それを考えて使います。

—学校で教わったことを、アルバイトで使ってみるんですね。

インタビュー時、すでに1年以上コンビニのレジをこなしてきたIさんは、すっかりベテランのアルバイトとして、日

本人の新人に仕事を教えるまでになっているが、なかなか仕事を覚えないと嘆いてみせる。また、日本人の学生アルバイトが出勤時間に遅れることに苦言を漏らすのである。

I：金曜日は、日本人は新人の人ですね。新人の人と働くのはちょっと大変ですね（苦笑）。全部自分でしないとイケないです。1ヶ月くらいになりましたけど、この人は1週間に1日しか入りません。まだ、全然慣れていない（苦笑）。本当に大変です。

I：大学生いるでしょ、日本人のアルバイト。バイトでいつも遅れるんですよ。私は入ったら、あきらめますね。めんどくさいですよ、帰るときは、いつもだいたい30分くらい残らないとイケない。後の人が来ないと、自分は出られないでしょ。

—あ、そっか。で、遅刻してくるんですか？

I：（苦笑）いつも遅刻するんですね。本当に。特に〇山ですけど、朝来る人はいつも遅れるんですよ。丁度の時間に誰も来ない。それで、ときどき連絡もしないで全部バイトに来ない人もいます。

日本に来た多くのネパール人学生が初めに困惑するのが、日本社会の時間に対する厳格さである。授業時間に数分遅れると遅刻扱いになることを、最初彼らの多くは理解できない。だから、日本語学校では初めのころに時間の厳守を徹底して指導するのである。ネパールは、文化的に日本よりも時間に緩やかな傾向がある社会なのだ。したがって、ここでIさんが、時間を守らない日本人学生に苦言を呈しているのは重要な語りである。それは、Iさんが日本での生活における日々の文化的折衝を経て獲得した、ある種の文化的な「適応」を象徴的に表しているからである。

—どうですか、日本の働き方。一生懸命働かないとイケないし、ルールもたくさんありますね。ネパールでもこういう仕事の仕方を、少しネパール人に教えたいと思いますか。

I：（強く肯定して）はい、はい。ネパール人にも教えたいと思います。ネパール人は今、そんなことないですね。時間も守らないし、いろいろなことがあるでしょ。そんなこと守らないですけど、日本でもらった経験を、いろいろな経験あるでしょ。それをネパール人にも教えたいです。

「日本語の授業なのにネパール語ばかり話す」、「ネパール人は時間も守らないし、いろいろなことがある」といったIさんの語りからは、他のネパール人に対する不満と、ある種の優越意識のようなものが感じられる。「規範に厳しい日本人」対「規範に甘いネパール人」の対立に基づく差異は、前者がより優れたものとして分節化され、それを日本で身につけたIさんは、あたかも啓蒙者のごとき存在である。そうした啓蒙者としてのアイデンティティは、言語的ハンディキャップがないにも関わらず仕事を覚えるのが遅い日本人アルバイトや、頻繁に遅刻をする日本人アルバイトに対しても向けられ、彼らに対する不満をわざわざ語ることから、「日本人よりも日本人らしいネパール人」のような同化主義的アイデンティフィケーション^{iv}の過程が、一方で露わになってくる。

他方、故意であるか無自覚なのかには拘わらず、頻繁に遅刻をする日本人についてIさんが語ることそれ自体は、「規範に厳しい日本人」対「規範に甘いネパール人」という均質化された文化的差異に揺らぎをもたらす行為でもあることも見逃してはならないだろう。つまり、両者の均質化された文化的差異を前提としつつ、一見するとその再構築に大きく寄与しているように見える、同化主義的で啓蒙主義的なIさんのアイデンティフィケーションのあり方は、同時にそうした均質的な差異を脱構築していく契機をも孕む両義性を持っていると考えることができるのである。

3.4. ケース4：Jさんの場合（女性：2016年1月インタビュー実施）

本研究のインフォーマントの中で唯一の女性であるJさんはIさんと同様にまじめな学生で、日本語能力も総合的に高く、やはり特に会話能力が突出している。高校を卒業後、父の勧めで日本への留学を決めた。日本については原爆を落とされた国といった知識しかなく、特に興味があったわけではなかったが、人々が礼儀正しくて優しく、治安がいいと父親から勧められて日本留学を決めたという。

—そういうイメージなんですね。

J: うん.

—実際に来てみてどうでした? お父さんが言っていたことと実際に会った, 日本人は?

J: 実際そうでした. 合っています.

—合ってた? ホントに(笑)?

J: うん, ホントに. へえ, こんな安全なところ. そして礼儀正しい. それは全然. 全然というのはたぶんないですよ, 他国は.

Jさんのアルバイト先は, 昼の食品工場と夜の居酒屋である. 以前は学校に紹介された菓子工場でも働いていたが, 中国人の社員から毎日「バカバカ」と罵られるのに嫌気がさして, 今の食品工場に移った. はじめは「つまらない仕事」だったが, 日本語で同僚の「おばちゃんたち」と話ができるようになってから, 楽しくなってきたという. また, 日本語能力の高さを評価されて, 時給も他より高くなったのだそうだ.

J: (嬉しそうに笑いながら) X組のSさんと, 私が二人, 一番日本語ができるので, 二人だけ900円です.

—じゃあ, 日本語があまり上手じゃない子たちは900円もないんだね?

J: あ, はい. 800円です.

—日本人の人たちはどれくらいもらっているか知ってる?

J: 日本人は, 780円です.

—え, なんで? 日本人のほうが低いの?

J: はい, 日本人のほうが低いです.

—どうしてかな?

J: 分からない. でもね, そこはネパール人は結構働くからですね.

—結構頑張っているから?

J: うん, 頑張っていますから. 頑張らなかつたら, 私たちが通訳して, なんかつも怒っているから(笑). 頑張らないといけなくないようにしています.

—ああ, なるほど. Jさんが通訳になって, 工場の人をもっと頑張ってもらいたいと言うから, Jさんが他のネパール人に通訳して言うわけ?

J: うん. 面接の時も行きます.

—ネパール人の留学生の面接もするんですか. それは面白いね.

J: (笑) その時に行きます. 別の学校も行きます.

—別の学校のネパール人が, 工場に行きたいといった時の面接で, Jさんも行く. その時に例えばアドバイスも言いますか. この人はいいかもしれないとか, 良くないとか.

J: ああそれ, 言います言います! はい.

通訳だけでなく, 同じネパール人として採用人事にも関わっているというJさんが, この食品工場にとって重要な存在となっているだろうことは, 容易に想像できる. だが, 居酒屋でのJさんは, さらになくてはならない存在である. 最大40席ほどの居酒屋を切り盛りするスタッフは日本人2人とネパール人2人の計4人で, そのうち注文を取ったり料理を運んだりするホール業務は, 基本的にJさんひとりでこなしているからである. いわゆる接客業としてのホール業務は, 客との円滑なコミュニケーションが必要となるが, その点も特に問題なく, むしろ楽しんでやっているとJさんは話す.

—居酒屋は楽しそうですね. お客さんと話をしていて楽しかったこととかありますか?

J: うん, あります.

—常連客はどんな人が来る?

J: 優しい人たちが来ます. 出身はどこですかって聞くので, ネパールです. 「何歳ですか」って. ×歳って言ったら, 「まだ若いですねー」って言って, 「こんな若い時から留学して, こんなところで一人で働いているのはね, 素晴らしいことですね, 頑張ってくださいねー」って, みんな優しくするから, それ面白いです.

—アルバイトで日本語をたくさん使ったから、日本語が伸びたと思いますか。それとも学校の授業がとってもいいから？

J：いいえいいえ、学校の授業が一番いいからです。

—あ、ホント（笑）？

J：はい、学校で勉強しないと、アルバイトでも何を使うかそれも分からない。

—だから勉強一番、頑張る？

J：はい。

—学校で勉強した日本語をアルバイトで使う？

J：アルバイトで使います、はい。でも、ときどきね、アルバイトで話している途中で、新しい言葉を覚える時もあります。

—そりゃそうだよね。聞きますもんね。

J：はい、聞きます。「え、それはなんですか？意味わからなかった」っていう。

学校での学習をアルバイト先で実践するという言語習得パターンはこれまでのインフォーマントが語ったものと同じだが、Jさんは学校での学習を大前提に、アルバイト先での日本語使用を捉えているようだ。特にJさんの場合は、通訳をしたり、ホール業務をひとりでこなしたり、結果として昇給に結びついたり、労働の内容や待遇と日本語能力の向上に相関関係が見られた。つまり、アルバイト先で高い日本語能力を求められるようになってきたことが、日本語学校における学習意欲を生み出す要因の一つとなっているとも考えられるのである。

工場にせよ居酒屋にせよ、Jさんはアルバイト先の話を楽しそうに語るのが印象的であった。日本での生活には非常に満足しており、仕事場で信頼を得ている自分を誇りに思っているという。そうしたアルバイトの経験から変化した自己について、Jさんは次のように語る。

—ネパールの人たちは、最初時間をあまり守らないから、アルバイトのときいろいろ怒られると思うんですけど、途中からみんな真面目になっていく人も多いと思うんですね。

J：私も、最初はしてなかった。一番変わったのは、それです。

—あ、そうですか。やっぱり日本に来てそういう習慣はだいぶ変わりましたか。

J：遅刻しないで、他の人に信頼される。そんなことを、まあ、他の人が何を考えているか、それは関係なく、自分が一生懸命頑張る。それは、変わった。

—やっぱりその、ネパールに戻ってから、それをビジネスとか他のネパール人にも教えたいと思いますか。

J：はい。日本のいいところを教えたいです。

—日本はルールばかりでとっても嫌だという人もいます。

J：ときどき嫌になりますけど。ホントにルールばかりで厳しすぎる時。自分も困っているときは、自分の心が分かんなくて、叱られるときとか、その時は嫌になります。じゃなかったら、たぶん大丈夫と思う。

—自分が困っているとき？

J：はい、困っているとき、なんか嫌に。困って間に合わないときや、病気になるとき。

—ああ、なるほどですね。そっか、そういう時も怒られる（笑）。

J：はい、そういうときも。理由も聞かないで、はい。

—自転車壊れたりとか？

J：はい、壊れたときとか。

「ネパールの人たちは時間を守らない」と言ってしまった筆者の質問の仕方には多分に問題があるが、Iさんもそうだったように、Jさんも「規範を守る日本人」対「規範に甘いネパール人」という対立図式によって差異を分節化している。「一番変わったのはそれです」とJさんが前者を肯定的に語る時、それは「日本人のように規範を守ることができるようになった」自己がアイデンティフィケーションされているのだが、同時にそれは「教条主義的な日本人」として否定的にも認識されうるものとなっている。

3.5. ケース5：Kさんの場合（男性：2016年3月インタビュー実施）

Kさんは、授業中の私語が多く問題等も素直に解こうとしない、とてもまじめとは言い難い学生だが、文法理解力、語彙力、表現力に優れ、これまでのインフォーマントと比べても会話能力がずば抜けて高い。比較的裕福な家の生まれで、「何でも好きなことをさせてもらえる」環境で育ったというKさんは、過去インドに二度留学した経験を持つ。日本には何の興味も持っていなかったが、ニュージーランドやフィンランドへ留学しようとして失敗した後、「日本はどうか」という友人の一言がきっかけとなり、日本への留学を決めた。日本語の学習期間はインタビュー実施時において1年11ヶ月だが、先に述べたように会話能力が高く、多くのことについて語られたため、インタビュー時間は最長の166分となった。

ネパールでの生活も含め、これまで一度も働いたことがなかったKさんは、日本で最初に始めた清掃のアルバイトが初めての労働経験となったのだという。その後、弁当工場や宅急便の集配所、コンビニなどでもアルバイトを始めるが、その過程で日本語能力が日本社会で生活する上でいかに重要か気づき、その習得に努めたと語る。

K：私はね、ホントに先生、泣いてしまったよ、ホントに。初めて仕事したのはね、掃除ですよ。日本語で全然話せなかったのですね、掃除の仕事しましたよ。初めて言葉を、日本語の言葉を覚えたのはね、ゴミ。アルバイトの人がね、「これはゴミ」と言いました。言って、ああ、うれしかったよ。これがゴミです（笑）。

K：私の場合はね、私はその時ちょっと日本語を、日本語の大切さが分かって。日本語をちょっとできない場合は、日本では生活できないことが分かりましたね。

—この工場で？

K：いえ、工場だけじゃなくて、日本に来て。周りを全部見て、ああ、日本語がどのくらい大事か、そのことが分かって、ちょっと勉強を頑張った。

—ああ、ホント。そっか＝

K：＝そういうことで、私はそのときは、他の人よりちょっと日本語を話せるようになった。日本語を上手にしゃべっていることを見たら、優しくしてくれるんですね。そんなに上手に話せることを、うれしい、喜んでくれる。もし日本語ができれば、仕事も困らないよ。社員たちがさせたいことをすぐに分かったら、社員もうれしくなるでしょ。

—どうやって勉強したの？

K：クラスで、家では時間がないので、クラスでね、授業中にちゃんと勉強しましたよ。

—あ、授業中にちゃんと勉強した。家では全然やってない？

K：いえ、家は今も。

—今もね（笑）。宿題とかもね。

K：そう、今も同じよ。私のやり方。授業の時だけ私はちょっと、ちゃんと勉強する。

「日本語を上手にしゃべると優しくしてくれる」という語り表れているように、Kさんの場合、日本語学習の動機が社会的便益を得るための方略的な目的に支えられている。特に工場では仕事ぶりが褒められたり、通訳として重宝がられたりするようで、現在ではパート社員として採用され、生産ラインの一部を責任者としてすべて任されているのだという。

K：今もね、自分が上手になったかと思ったけど、日本人と話すときは、まだでしょ。

—まーね、ペラペラしゃべってるよ（笑）。

K：いえいえ（笑）。今もまだまだだよ。今もまだ、コンビニで働いているとき、ちょっと、新しい言葉、local language ですよ、先生。

—あ、そうね、博多弁ですね。

K：博多弁とかがあるでしょ。あー、まだまだですよ。まだ（笑）。

—博多弁、あれは難しい。学校で教えないからね＝

K：＝学校で勉強した日本語とね先生、なんか生活の日本語は全然違うよ。

—あ、そう？

K：そうだよ。違うよ。たぶん違うと思う。みんなそう言うから。

—じゃあ、生活で使う日本語というのは、どちらかというと、工場とか？

K：そうそう。アルバイトで。

これまでのインフォーマントの場合、学校での学習をアルバイト先で実践するというパターンが語られたが、Kさんの場合は、学習の位相をある程度区別して考えているようだ。それは方言だけでなく、例えば「初めて覚えた日本語はゴミ」とKさんが述べていることにも表れている。このエピソードはインタビュー中に二度も語られたもので、Kさんにとって非常に印象深い経験だったことが窺えるが、実際は来日後すでに学校で多くの日本語を教わっているはずである。それにもかかわらず、「ゴミ」を最初に覚えた言葉として印象深く捉えているということは、アルバイト先での社会的経験を通して日本語を覚えていくことも、学校での学習と同様のものとしてKさんが捉えていることの表れではないだろうか。

—働くことと、日本語を勉強することってどうなんですか。

K：今、どちらも大事。アルバイトでも勉強になるでしょ。

—さっき、学校で勉強する言葉とアルバイトでってね。

K：そう、これは何て、日本語で何て言いますか。勉強にしたい場合はできるでしょ。そういうこともしましたよ、私。私は自分が分からないことを、他の日本人に、日本語で何と言いますか。そういうことをしました。

—じゃあ、アルバイトも日本語の勉強のひとつではあったってことかな？ どうか？

K：なったと思う。人によって違うでしょ。

アルバイト先での実践的な学習に重きを置きながらも、これまでのインフォーマントとは違い、Kさんは職場に貢献する自己を語るということがない。責任ある仕事にせよ、職場で仲の良い人物にせよ、こちらから水を向けても多くを語ろうとせず、むしろ、仕方なく働いているのだということがしばしば強調され、楽しいことより辛いことが語られる。

K：今私が働いているコンビニでは、周りには居酒屋とかクラブとかあるんですよ。変なお客様が来るよ。私ホントに殴りたい。

—（笑）殴りたいくらい。

K：ホント、それくらいのお客様が来るんですよ。

K：日本ではお客様に神様くらいにするんですよ。ネパールではしない。あなたは来なくてもいい。来なくてもあんまり変わらないよ。そういうことが言える。日本では、お客様が悪いことをしても、すいません、すいません。自分が下がらなければならない。

—下がらなければならないね。最初は どうでした？ コンビニの仕事をするとき、嫌なお客さんが来ても、自分がこうしなれないけない＝

K：＝今、私しないよ。関係ないよ。

—しない？

K：うん。一回は「ありがとう言って」と言われた。酔っぱらって、周りに二人女の人。レジには他の人がいたね。私はちょっとゴミを拾ったりしていた時、私にも「ありがとう言って」と言ってきたよ。私は「ありがとう、なんで言う？」と言ったね（笑）。

—そしたら何て言った？

K：（笑）そのまま行ったよ。

K：満足じゃない、全然。不満。自分がしたいことがね、できてないから。

—全然できなかった？ このIT（注：KさんはインドでIT関連の勉強をしていた）の？

K：そうそうそう、IT。2年間無駄になったでしょ。

—日本語ばかりで？

K：そう、日本語ばかりで。2年間の中で、私は何を得たか。日本語だけでしょ。

Kさんのインタビューでは、これまでに見たような「規範に厳しい日本人」対「規範に甘いネパール人」という差異の対立における前者の優越性は語られないし、留学経験で得られたものも、「日本語」と「お金」しかなく、しかもそれは「無駄」とみなされている。したがって、本国の人々に日本で得た経験を伝えるといったこれまでの言説パターンは一切出てこない。むしろ、「客を神様のように扱う」日本の文化的な規範自体に疑問を投げかけることによって、ネパール人としての肯定的なアイデンティフィケーションが図られているように思われる。

4. 「働く留学生」と多文化共生社会

4.1. 「状況的学習」というアルバイト経験の学習効用と就労制限の緩和

本稿で取り上げた「働く留学生」たちは、いずれも2年足らずの短期間の内に高い日本語能力を獲得した者たちであった。1年半から2年に渡る留学期間における日本語学校での学習目標を、仮に「日本語能力の習得・向上」と設定するならば、彼らはその目標を十二分に達成していると言える。しかしながら、自らの留学目的を第一に「出稼ぎ」と捉えているGさんのみならず、日本での勉学をまじめに志向する他の留学生であっても二カ所以上のアルバイト先を掛け持ちしており、当然ながら週28時間以内という就労制限は守れていなかった⁵⁾。前稿で見たように、就労制限を順守すれば生活費と学費を賄うことが物理的に不可能なためである。積極的にせよ消極的にせよ、週28時間以上の就労活動をせざるを得ない状況の中で日常生活を送っている彼らのエスノグラフィを読み解いていくと、次のようなことが明らかになってくる。

まず、アルバイト先における経験は、日本語能力の向上や文化的な学習と直接的にも間接的にも結びついているということである。学校で教わった知識を元にして、アルバイト先で日本語の使用を実践するという学習パターンは共通して語られた。また、JさんやKさんのように、自身の日本語能力が向上するのにしたがって、職場環境や待遇、同僚との人間関係などに良い影響が出るというケースもあり、アルバイト先での経験が学習動機にも結び付いているということが分かる。

アルバイトの職種がどのようなものかは、日本語の使用頻度と関わるため非常に重要である。いずれのインフォーマントも、宅配便の集配所や食品工場などよりもコンビニや飲食店などの接客業の方が、より日本語を話す機会が多く、職場の人間とのコミュニケーションも密だということを語っている。来日当初は日本語を使用しなくてもあまり支障のない労働を行い、日本語能力がある程度向上するのに従って、まるでキャリアアップするように、職場をコンビニや弁当チェーン店、居酒屋などへとシフトさせるというのが、ほとんどの留学生に共通して見られる。つまり、一言で「非熟練労働」と言っても業務内容はさまざまであり、日本語能力の向上が早いものは接客業へと早々に移動し、学校教育で受けた知識を職場で実践しながら、さらに日本語能力を向上させていくということになる。

学校教育に代表されるような脱文脈化された命題的知識の獲得ではなく、実践共同体における社会的実践を「状況的学習^{vi)}」として理論化したレイヴとウェンガーの理論を援用すれば、本稿で見てきた「働く留学生」たちは、いずれもアルバイト先という実践共同体に「新参者」として「正統的周辺参加」し、知識と学習を相互作用させつつ、交渉によって意味を生産しながら、「熟練者」としての「十全的参加」へと移行する過程において、言語と文化に関する学びを得てきていると考えられる(レイヴ・ウェンガー, 1991/1993)。

その学習過程に付随するアイデンティフィケーションは、主に「規範を守る日本人」対「規範に甘いネパール人」という二項対立的差異を軸に分節化され、前者が学習されるべき「良いもの」として言説化される傾向にあった。しかし、その学習で得たものを手掛かりにすることで、実際は二項の価値を転倒させたり、差異自体を揺るがしたりするような、差異を巡る駆け引きも垣間見られた。本山(2001, p133)は、移民の日常における文化実践は「常にホームの文化とホスト国の文化の「あいだ」で絡まりあいながら進行」するため、文化は「決して透明なものではなく、政治と個人的体験をつなげるもの」として認識されると述べているが、本稿で話を聞いた留学生たちも、個人的体験を通して政治的に自らの文化的アイデンティティと交渉しながら、日本での日常を送っていると言える。

このように「状況的学習」という視点から「働く留学生」の日常を紐解いていくと、アルバイト先での実践的な社会的相互作用は、言語能力の習得という意味においても、文化的な学びという意味においても、日本語学校における教室活動にも劣らない程の実践的で社会的な学習効果を留学生にもたらしていると言えるのではないだろうか。本稿で話を聞いた留学生の労働時間はいずれも週28時間をはるかに超え、九州7県と熊本市が制限緩和として内閣府に共同提案した「週36時間」に近い者もいた。しかし、日本語能力の獲得という点で見れば、いずれも学習の支障になっているどころか、アルバイト先での経験が大きく活かされていることが、本研究では明らかになったのである。

前稿で問題提起したように、現在の「留学生労働力」を巡る労働市場の需給構造は、日本語学校・各種事業所・留学生

というステークホルダーのうち、留学生のみが法律違反を犯すという多大なリスクを抱えることによって成立している。積極的な労働移民の受け入れには国民的な議論が必要であり、実現するまでにはかなりの時間が要されるだろう。そうであれば、現在日本に暮らしている留学生たちのリスクや負担を大きく軽減させる意味でも、就労制限の緩和が必要なのではないだろうか。

4.2. 「働く留学生」と「多文化共生」ー移民時代への過渡期

前稿で明らかになったように、ネパール人留学生の急増は、今日における南北の経済格差に起因した、グローバルな移民現象を背景としていた。人口減少が今後より深刻になっていくであろう日本社会において、新規労働力の枯渇は、現在の資本主義経済が続く限りさらに大きな課題となっていくであろう。議論や法律上の整備に時間はかかるだろうが、遅かれ早かれこの社会は、現在ネパール人留学生が増加しているのと同じような「グローバル移民」というコンテクストを背景として、海外労働移民を「留学生」というバックドアではなくフロントドアから積極的に受け入れざるを得なくなる。「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的違いを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていく」(総務省, 2006 p5) 多文化共生について、政府が積極的な研究や推進に乗り出していることも、将来の移民社会を見据えた上でのことであろう。

多文化共生についての議論はこれまでも数多くあるが、何をもって「共生」とするかなど、明確な実現性を帯びたものとはなっていない。仮に、それぞれに均質化され区別される相対的な文化が社会に複数存在し、差異を認め合いながら共に生きることが多文化共生のイメージなのであれば、その多様性は「国民統合」を目指す国民国家のあり方と矛盾し、結果としてマジョリティへの同化を要求する社会へと変貌するであろう。たとえば、近藤(2009, p.26)は「多文化共生政策」が「統合政策」と背景事情を同じくすると指摘し、受け入れ側への適応を強調すれば、「同化政策に近い意味を帯びる」と述べている。また、酒井(1996, pp.83-84)は、日本のような「均質志向社会性」を帯びた社会では、マイノリティが選択できる道は、「国民国家に同一化する同化」と「自己破壊的な結果を招く分離」の「二者択一以外の回路がほとんど存在しない」と指摘している。

本稿の事例で言えば、IさんとKさんは、同化と分離の対照を見せているようにも思える。しかし、Iさんは経験と言説によって、「規範を守るネパール人」を「規範に甘い日本人」との対比の中で分節化しており、それによって、同化の目標としての「日本文化」は、本質的でも均質的でもないことを暴いている。一方、Kさんの場合は日本における社会的規範自体に逆らうことで、「既存の合理性の限界を指摘」しているとも言える。合理性に対するこうしたマイノリティの異議申し立ては「対立、論争、さらに闘争において既存の合理性を再分節化する」ことで、マジョリティ自身をも「脱中心化」するような変化をもたらす契機を生み出す可能性を持つ(前掲1996, p.86)。

このように見ていくと、おそらく「多文化共生社会」は実現したり完成したりするものではなく、その担い手同士の文化的なアイデンティティ・ポリティクスや、場合によってはコンフリクトを経ることで、それぞれの文化的境界線の脱構築と再構築が不断に繰り返されながら、複雑に展開し続けるダイナミックな社会ということになるだろう。本研究におけるネパール人学生の語りを聞けば、地域における多文化共生はすでに始まっていることが分かる。こうした留学生がさらに増加し、学校や職場を通して主体的に地域と関わりながら、それぞれの文化を多様な形で不断に再構築していくことで、「共に生きる」社会はダイナミックに活性化するだろう。その意味で、現在の「働く留学生」を中心とした地域社会とのさまざまな相互作用は、フロントドアから移民を受け入れ、本当の意味での「移民時代」を迎えるまでの過渡段階として、社会的な素地を徐々に構築しつつあると捉えられるのではないだろうか。

- i ライフストーリー・インタビューでは、聞き手と語り手によって相互構築されたものとして「語り」を捉えるため、その内容だけでなく、「どのように語られたのか」に対しても注意が払われる。そのため、桜井(2005)は、書き起こしはなるべく逐語おこしに努め、沈黙や相槌なども記述すべきとしている。一方、語りの内容把握を重視する立場から、大久保(2008)のように、読みやすさを第一に優先する者もいる。ここでは、日本語学習歴2年未満のネパール人学生が、日本語を使用して語ったという点を考慮する必要がある。たとえば沈黙は、語りの内容を考えたり、困惑しているだけでなく、日本語の単語を探っている場合もある。これを峻別するのは困難で、意味を解釈しようとする、極めて恣意的なものになってしまう危険性が大きい。相槌も、日本語母語話者同士で行われるそれとは、効果が異なってしまう可能性が否めない。そのため、本研究では大久保の方法論に近い仕方でも書き起こしを行い、聞き手を含めて「語られたこと」に、より注目するようにした。
- ii ケース1からケース5、GさんからKさんまで、本稿ではインタビューを行った順序通りに記述している。
- iii 記号「=」は、相手の発言が終わる前に、重ねるように発言を始めたということを意味する。

- iv 本稿では、「アイデンティフィケーション」という用語を、ホール(2001, p.10)の言うような「決して完成されない構成作用、プロセスとして」捉える意味で用いている。
- v Gさんは確かに留学目的を「出稼ぎ」としていたが、日本語能力の獲得という点においては、外見上は他の留学生よりもはるかに優れている上、進学もしている。一方、極めて学習態度の良いまじめなIさんであっても、経済的問題のためにコンビニのバイトを掛け持ちしており、就労制限を守れてはいないのである。こうしてみると、いわゆる「出稼ぎ留学生」と「まともな留学生」との間に境界線を引くことは、実際は極めて困難だということが分かる。もちろん中には全く勉学に励まず、ただひたすらアルバイトに明け暮れたり、難民申請をして特別活動ビザを得ようとするケースもある。だが、そうした分かりやすいケースを除けば、両者に明確な境界線を引くためには就労制限を順守しているか否か、もしくは本国に定期的に送金しているか否かで判断するしかない。しかし、そうすればネパール人留学生のみならず、日本にいる留学生のほとんどは「出稼ぎ留学生」ということになってしまうだろう。前稿でも触れたように、日本が留学先として人気があるのは、特に親日的でも、日本の社会や文化に興味があるからでなく、「働きながら同時に勉強もできる」という理由が第一なのである。したがって、実際は就労と勉学のバランスをどのように取っているかの度合いの問題なのであり、「出稼ぎ留学生」と「まともな留学生」の間に境界はなく、むしろ連続的であると言える。
- vi 日本語教育という観点から見れば、こうした「状況的学習」は、学校における教室活動に経験的な素材を提供するという意味で重要である。佐藤ら(2013, pp.11-25)がまとめたところによれば、日本語教育では80年代から言語と文化の関係が議論されるようになり、本質主義的で特殊な「日本文化」や「日本人の社会文化行動」を「知識として習得」したり、理解したりすることが求められるようになった。90年代に入ると、「コミュニケーション能力」を養成するという目標の文脈の下で、「日本文化の体系的な知識」が、主に「日本事情」という形式で日本語教育の一環に取り入れられるようになる。しかし、こうした教育モデルでは、知識として認知することができる実体的で固定的な「日本文化」が学びのゴールとして設定されるため、「ネイティブ」をお手本とした不平等な権力関係が構築される危険性を孕むものであった。文化が政治に左右され、歴史的に流動的であるということが日本語教育で議論されるようになるのは、2000年代に入ってからのことである。ただし、こうした社会構築主義的な「批判的アプローチ」は、佐藤らが言うように、「何もないところには」「成立しえない」のであり、こうしたアプローチに基づいた教育実践をどのように生み出していくかが、現在の重要な課題となっている。その意味で、教室以外の実践共同体における学習者の経験自体を素材とすることは、文化の重層性や複数性、そして矛盾性に対する気付きを得られるような教育の可能性を持っているのではないだろうか。

引用文献

- 1) 岩切朋彦(2015). 日本語学校におけるネパール人学生の様相とその諸問題—福岡県A校に通うネパール人学生へのライフストーリーインタビューから『西南学院大学大学院国際文化論集』9,79-112
- 2) 大久保孝治(2009). 『ライフストーリー分析—質的調査入門』学文社
- 3) 近藤敦(2009). なぜ移民政策なのか?. 川村千鶴子, 近藤敦, 中本博皓(編)『移民政策へのアプローチ—ライフサイクルと多文化共生』24-27 明石書店
- 4) 酒井直樹(1996). 『死産される日本語・日本人—「日本」の歴史-地政的配置』新曜社
- 5) 佐藤慎二・奥泉香・仲潔・熊谷由理(2013). 文化人類学と言葉の教育における文化概念の変遷と現状. 佐藤慎二・熊谷由理『異文化コミュニケーション能力を問う—超文化コミュニケーション力をめざして』3-31 ココ出版
- 6) 桜井厚(2005). ライフストーリー・インタビューをはじめ. 桜井厚・小林多寿子(編)『ライフストーリー・インタビュー—質的研究入門』11-70 せりか書房
- 7) ホール, S(2001). 宇波彰(訳). 誰がアイデンティティを必要とするのか?. ホール, S, ドウ・ゲイ, P, 宇波彰(監訳)『カルチュラル・アイデンティティの諸問題—誰がアイデンティティを必要とするのか?』7-35 大村書店(Hall, S. (1996). Who Needs Identity?. in Hall, S, & du Gay, P. (Ed.) Question of Cultural Identity Who Needs Identity?. London: Sage Publication
- 8) 本山謙二(2001). 人種・エスニシティ. 吉見俊哉(編)『知の教科書 カルチュラルスタディーズ』123-145 講談社
- 9) レイヴ, J, ウェンガー, E(1993). 佐伯胖(訳)『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』産業図書(Lave, J, & Wenger, E, Situated Learning Legitimate Peripheral Participation. Cambridge: Cambridge University Press
- 10) 総務省(2006). 「多文化共生の推進に関する研究会報告書—地域における多文化共生の推進に向けて」

(2017年12月1日 受理)